秋田県教育カウンセラー協会

「私の一冊」　第２回

秋田県教育カウンセラー協会代表
佐　藤　健　吉

『カウンセリングの技法』
國分 康孝 著（誠信書房，1979 年）

この本に出会ったのは，もう四半世紀も前のことになります。30 代後半，教員としての仕事にも少しずつ慣れ始めた頃でした。ちょうどその頃，私は「教育カウンセリング」という言葉に出会い，少しずつ関心を深めていた時期でもありました。

当時の私は，カウンセリングというと，心に傷を抱えた人の話をひたすら聴き，こちらから指示や提案はしない――そんな，いわば「静かな支援」というイメージをもっていました。

ところがこの本を開いて，いきなり目に飛び込んできたのがこの定義でした。

「カウンセリングとは，言語的および非言語的コミュニケーションを通して行動の変容を試みる人間関係である。」

まさに目から鱗でした。さらに読み進めると，カウンセリングには「教育的・開発的な側面がある」という記述に出会い，「これは，私が学校現場でずっと感じていた「何か」に答えてくれる考え方かもしれない」と直感したのを，今でも鮮明に覚えています。

この本では，カウンセリングの三段階（リレーションづくり・問題の核心に迫る・処置をする）や，面接の進行における具体的な工夫，さらにはカウンセラーの基本的な姿勢や倫理に至るまで，理論と実践のバランスがよく書かれています。決して抽象論ではなく，現場での試行錯誤や先生自身の体験が土台になっているので，読み進めるごとに自分事として受け止められる内容ばかりでした。

中でも忘れがたいのは，國分先生が霜田静志先生からかけられたという一言です。「それはね，（クライエントが）君に頭を下げているのではないよ。君の学問に頭を下げているのだよ。」

この言葉は，教師として，また支援者としてのあり方を私に深く問いかけるものでした。専門性というのは人を操作するための力ではなく，誠実に学び続けた先に得られる「敬意の対象」であるということ。それを忘れてはならない，と。

本書は，カウンセリングという営みを，単なる技術としてではなく，人間と人間の間に生まれるリレーションとして捉えている点に，私は何よりも惹かれました。

國分先生の本を手に取るたびに，当時の驚きがよみがえります。日常の人との関わりの中で，この本で学んだことが，今も私の根底に息づいています。」